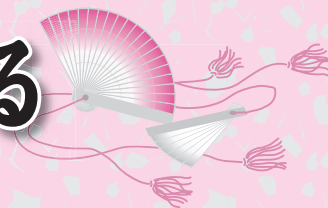


西塩子の回り舞台 組み立て・公演に向けて！

伝統の舞台 幕が上がる



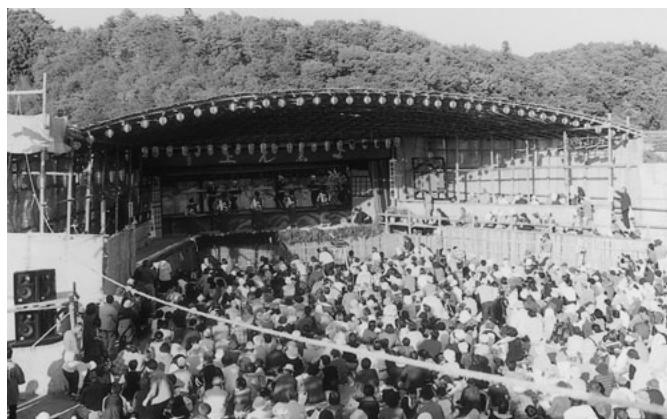
先月号で、平成の大幕についてお伝えした西塩子の回り舞台。
今月号では、10月28、29日に行われる公演に向け、その舞台自体について、組み立てや上演されるお芝居の内容などにスポットを当ててお伝えします。

西塩子の回り舞台とは？

大宮地域西塩子地区に保存されている西塩子の回り舞台は、回り舞台の付いた組立式農村歌舞伎舞台で、現存する中では日本最古の物といわれています。

回り舞台とは、舞台床の一部を円形に切り抜き、これを回転して舞台転換をしたり、印象的な演出効果を得るために設けられた床の機構のことです。

江戸時代の初めに興った歌舞伎は、市川團十郎などの名優や、井原西鶴、近松門左衛門といった名脚本家の登場によって、江戸時代を通じて人々に熱狂的に愛されました。その熱狂ぶりには、江戸や京都などの中心地だけでなく、



▲平成13年第1回定期公演の様子

く、このあたりのような農村地域にも伝わり、昭和初年まで日本各地に歌舞伎の舞台は作られていたのです。

舞台を復活させた地区の力

江戸時代の後半から芝居や歌舞伎などで長年人々を楽しませてきた舞台も、様々な娯楽の普及により、昭和20年ごろを最後に組み立てられることなく忘れ去られようとしていましたが、平成9年に西塩子地区の皆さんの熱意により舞台の復元作業が行われて歌舞伎が上演され、翌年は西若座を結成して自分たちも舞台に立ちました。

その後、地域の皆さんの熱意と協力で回数を重ね、今年の10月、5回目となる公演が行われるのです。

組み立てに向けて

回り舞台は、青竹のアーチ型の天井が付き、間口、奥行きとも約20メートル、高さ7メートルの大きさになります。柱や束に使用する材木200本余と、屋根に用いる真竹300本余で組み上げ、真竹は毎回伐り出します。

規模の大きな舞台作りのため、作業はかなり大掛かりなものとなり、西塩子地区の舞台保存会の中で結成した舞台組み立て班が中心となり進められます。

舞台の場所は例年と同様、大宮公民館塩田分館のグラウンド。組み立ては9月24日から始められる予定です。

公演後、舞台は1日で解体され、会場はもとの静かな空き地に戻ります。昔は晩秋の麦蒔き前の畑を借り上げて舞台を組み立て、芝居が終わると村人総出で畑を耕し、持ち主に返したそうです。



▲前回の組み立ての様子

公演に向けて

平成9年の舞台復活後、西塩子地区の皆さんは、地芝居の一座「西若座」を結成しました。今年も、公演へ向けて練習の真っ最中。素晴らしい舞台を見せてくれることでしょう。

また、今年の公演では伝統芸能を後世へ伝えていこうと、総合的な学習で歌舞伎や舞踊に取り組んでいる地元塩田小学校の児童や、子ども歌舞伎（常磐津）伝承教室に参加している市内の児童による舞踊も披露されます。

見どころ 当日上演される主な演目の見どころをご紹介します！

10月28日

常磐津「子宝三番叟」(塩田小学校3・4年生)

「三番叟」は老人の姿をした神が天下泰平・五穀豊穰等を祝して舞う姿を芸能化した能の「翁」を歌舞伎舞踊に取り入れたもので、様々な趣向で多くの曲が作られました。この曲は、12人の子を持つ子福者が四季の遊びのおもしろさを物語る内容で仕立てられた常磐津で、幕開き等に演ずるおめでたい曲です。

歌舞伎「白浪五人男」(塩田小学校3・4年生)

「白浪」とは盗賊のことで、日本駄右衛門を首領とする、弁天小僧菊之助、南郷力丸、忠信利平、赤星十三郎の五人の盗賊団の物語。五人は呉服商浜松屋に盗みに入ろうとしますが、ひょんな事から浜松屋の主人幸兵衛が菊之助の実父、浜松屋の養子の宗之助が駄右衛門の実子ということが判明し、一同は何も盗らずに桜満開の稲瀬川堤に落ちのびます。捕手を前に五人それぞれが、自分の来歴を七五調の名ゼリフで語る場面が見どころ。回る舞台も御注目！

常磐津「将門」(常磐津教室参加児童)

常磐津の名曲。雷鳴がとどろく場面があり、雨乞いの意味を持たせて地方の祭礼で多く上演されました。平将門の娘滝夜叉姫は、将門の残党を詮議する君命を受けて相馬の古御所に忍び込んだ大宅光國を、色仕掛けで味方に引き入れようと思いますが、本性を見抜かれて大立ち廻り。豪華な衣装をご覧ください(29日も出演者を替えて上演)。

歌舞伎「菅原伝授手習鑑 寺子屋の段」(西若座)

菅原道真の元家臣武部源蔵は夫婦で流刑となった主の子秀才をかくまっていますが、これが露見し秀才の首を差し出せと命令されます。思案に暮れた二人は自らが開く寺子屋に入門してきた子を殺め、秀才の首と偽って検分に来た松王丸に渡します。しかし、実はその子は道真の恩を受けた松王丸の子で、身代わりを覚悟で寺入りさせていたのです。源蔵夫婦や松王丸夫婦が子を悼む場面で涙を誘う、地芝居の十八番です。

10月29日

人形浄瑠璃「壺坂霊験記」(真壁白井座)

幼い頃の病気が元で盲目となった沢市の目を治そうと、女房のお里は毎朝、壺坂の観世音に参拝していました。事情を知らない沢市は妻の不倫を疑いますが、妻の貞節を知り苦勞をかける自分を責めて壺坂の断崖から身を投げます。それを見つけたお里も、後を追って谷底に飛び込みます。そこへ観世音菩薩が現われて…。

「三つ違いの兄さんと」ではじまるお里の口説きで有名な、涙なくしては見るこのできない名曲です。

友情出演：真壁白井座(桜川市)

大正年間まで活躍した人形浄瑠璃の白井座を、平成14年に復興。驚異的な上達ぶり、公演はいつも大入り満員です。西若座も元是人形浄瑠璃一座。組み立て舞台での公演をお見逃しなく！

*都合により、スケジュールは変更になる場合があります。

▶西若座の練習風景



ボランティアの活躍

3年に1度とはいえ、舞台の組み立てと公演の実施には大変な労力が必要とし、西塩子地区の皆さんだけでは限界を感じていました。

そこで、平成13年から、回り舞台を支援するボランティアの方を募集しました。

例えば、裁縫の好きな方は衣裳づくり、日曜大工が趣味の方は舞台道具の製作、その他情報の発信、マーケティングなど。先月お伝えした大幕作りもその一例です。それぞれの得意分野を活かし、歴史ある舞台を次の世代へ伝えていこうと張り切っています。



▲衣装作りの作業風景

西塩子に続く

市内には、西塩子の他にも下小瀬、下松沢、門井、国長地区にも素晴らしい組立て式歌舞伎舞台があります。また、立派な山車や屋台が出る歴史ある祭礼や、昔からの神事などが各地に伝承されています。しかし、歌舞伎舞台と同様、戦後から50年程の間に人々の生活や意識の変化から消え去ったり規模が縮小されたりと存続が危ぶまれる状態です。

今後、西塩子の舞台復活における経験やノウハウを活かし、伝統文化を活用した地域づくりや子どもたちのふるさと理解に繋げていくことが期待されています。